

氏 名	みずのえり 水 野 英 莉
学位(専攻分野)	博 士 (文 学)
学 位 記 番 号	文 博 第 375 号
学位授与の日付	平 成 19 年 1 月 23 日
学位授与の要件	学 位 規 則 第 4 条 第 1 項 該 当
研 究 科 ・ 専 攻	文 学 研 究 科 行 動 文 化 学 専 攻
学 位 論 文 題 目	サーフィンとスポーツ体験のエスノグラフィー ——ジェンダー・ローカリティ・コミュニティ——

論文調査委員	(主 査) 教 授 伊 藤 公 雄	教 授 松 田 素 二	教 授 落 合 恵 美 子
--------	----------------------	-------------	---------------

論 文 内 容 の 要 旨

本論文の目的は、サーフィンというスポーツ実践への観察を通じて、そこに参加している女性の経験に焦点を当て、スポーツをめぐるジェンダーの問題を明らかにしようとするものである。具体的には、女性サーファーの経験を通して、サーフィン・コミュニティのジェンダーによる支配構造を描き出すとともに、そこで生じている女性サーファーの葛藤や、彼女たちが自分たちの居場所を確保するために周囲と交渉する様子を明らかにするなかで、近代的ジェンダー秩序にからみとられているスポーツの日常を突破していく可能性を探ることが、本論文の主要な課題である。

現代社会において、スポーツの記録や参加者数の男女格差は大幅に縮小傾向にあり、「男女の身体的性差」を乗り越えようとする志向性さえも明確に見て取れる。「男性優位主義最後の砦（男性の優位性を唯一主張できる場）」とされたスポーツにおいてさえ、男性優位のジェンダー秩序はその正当性の根拠を失いつつあるように思われる。しかし、にもかかわらず、多くの人々は「男性の身体のほうが本質的に優位である」という身体観を根強く支持し、旧来のジェンダー秩序を変革しようとする動きを激しく非難する状況もさまざまな場において生じている。現代社会においては、性に対する認識が大きく変容しつつあるといわれるが、他方で、旧来のジェンダー秩序は、多様にその形態を変化させつつ存続し続けているのである。

本論文では、こうした状況のもとで、性による差別や偏見にさらされることなく、全ての人が対等にスポーツに参加する権利が保障される社会的環境の可能性を探るとともに、特に男性優位が鮮明な形で表現されているスポーツの場において、女性たちが、いかにして居場所を確保できるかという課題に答えようとするものである。スポーツにおける性差別の問題に対しては、これまでも、社会制度や歴史過程を中心にアプローチする研究が多数存在してきた。本論文では、こうした先行研究をふまえた上で、フィールドワークを通じて、スポーツ・コミュニティを形成する人々の日常的で微細な行為——恋愛等も含めた親密な人間関係——のなかにある技法や作法に着目する。スポーツとジェンダーの研究においては、こうした微細な人間関係の襞の問題は、ときに、本質的なものではなく、単なる瑣末なエピソードとして切り捨てられがちであった。しかし、本論文においては、このような微細な社会関係のなかにこそ旧来のジェンダー体制を脱中心化する可能性が秘められているという観点から考察を進めている。なぜならば、スポーツをする人々にとって、スポーツの行為のみならず、些細な出来事の日常的な連続こそがスポーツ体験の総体であり、それらが不断にマクロなジェンダー構造を形成し、スポーツにおける「明文化されない女性排除の装置」として機能していると考えたからである。徹底的に細部にこだわったミクロなジェンダー関係を分析することは、問題に直面した人々自身を支え、スポーツとジェンダー研究に理論的な貢献をもたらすものだと考えている。

本論文の構成は以下のようである。

序章「問題の所在」では、スポーツ社会学とジェンダー研究における先行研究について、特にスポーツと男性優位主義との関係を中心に整理して検討を行なっている。また、従来のフィールドワークの方法論の整理の上で、特にジェンダー研究の視点に立った研究方法論の意義をふまえ、本論文におけるフィールドワークの方法論上の立脚点を明らかにしている。

第一章では、サーファーの経験を理解する上で必要だと思われるサーフィンをめぐる歴史的流れを整理し、サーファーたちの日常実践について具体的に記述している。もともとミクロネシアの島々で、階級儀礼、漁の手段、遊戯などとして、近代社会の競争原理とは異なるところから出発したサーフィンが、19世紀後半から20世紀初頭にかけてスポーツへと変容していったプロセスを述べるとともに、このスポーツが、ウインドサーフィンやスカイダイビング、スケートボードなどとともに、スポーツのメインストリームから距離をとった、記録の数量化や制度化を嫌う「エクストリーム・スポーツ」という特徴をもつことなどを論じている。その上で、具体的に、本論文のフィールドワークの研究対象としてのサーファーたちが、サーフィンを開始するに至った経過や、それが生活スタイルの一部になるまでのプロセスを追い、サーファー自身にとってのサーフィンの意味や、その社会的世界を明らかにしている。

第二章では、あるサーフショップのメンバーたちに焦点を当て、サーファーの世界で表現される「男らしさ」とはいかなるものか、そして彼らのホモソーシャルな「男同士の絆」はいかに構築されているのかを考察している。フィールドワークやインタビューを通じて、サーファー男性たちの間で、彼らが、男性優位の社会構造を再生産するために用いるストラテジーや、そのなかで形成されていく「男同士の絆」の詳細が解明される。

第三章では、サーフィンの世界で行なわれる女性排除と差別の実践について、具体的な諸事例に基づいて検討している。従来スポーツとジェンダーの研究では、スポーツにおける性差別について論じる際、男女の生物学的性差にもとづいて差別が正当化される言説を問題視してきた。しかし、サーフィンにおいては、アスリート以外の一般愛好者の場合は男女のレベルにそれほど目立った格差がなく、しかも「男性並みになること、男性を超越すること」は、一概に目標とされないという特徴がある。サーフィンにおいては、他のスポーツと比較して、身体差を根拠に性差別を正当化することがしにくいのである。それゆえ、ここで現実実践されている性差別は、女性を多様な個性を持ったサーファーとしてではなく、過剰な親切やセクシャル・ハラスメントによって欲望の対象として扱うという方法によって展開されるものとなりがちである。こうした観点にたつて、男性サーファーの女性に対する対応の構図と、それに抵抗する女性サーファーの攻防について、フィールドワークを通じて、さまざまな事例を扱っている。

第四章では、前章で論じた性差別の構図を踏まえ、男性主導のサーフィンの場において、女性たちがいかにサーフィンを続け、居場所を獲得していくのかについて考察する。また、彼女たちの行う、男性サーファーの行為の模倣によって居場所を得ようとする戦略の可能性と限界についても批判的に検討している。

第五章では、サーファーのコミュニティにおいて新しい規範として登場しつつある「旅としてのサーフィン（固定しない生き方）」と「ア・ウェイ・オブ・ライフとしてのサーフィン（ローカルな要素の強調）」をとりあげ、この新しい実践のなかから、従来のジェンダー秩序を越えるサーフィン実践の可能性について検討している。特に、サーファーの世界にジェンダー以外の新たなダイナミズムや権力関係が生じることで、従来のジェンダー体制の分散化・脱中心化が生じつつある状況を詳細に分析した。

終章では全体の議論を振り返り、本論文が、サーフィンを論じることでスポーツとジェンダー研究にもたらしえた知見について示している。

すでにふれたように、サーフィンは、他の近代スポーツとは異なり、競技スポーツとしてよりもむしろパフォーマンス中心のスポーツとして成立し発展してきた。それが、やがて競技も含めた新たな形態をもつとともに、1960年代以後のカウンターカルチャーの動きと連動しつつ、男性主導のスポーツとして発展してきたという特徴をもっている。その意味で、サーフィンは、ジェンダー研究の対象としても、またスポーツ研究の対象としても、きわめて興味深い研究テーマであると思う。本論文は、こうしたサーフィンの独特の問題状況を、フィールドワークを通じて考察した上で、近年のサーフィン文化の新しい動きのなかに、近代スポーツを超える可能性を探ろうとしたものである。

論文審査の結果の要旨

本論文は、長期間にわたるフィールドワークをもとに、日本におけるサーフィン文化をめぐる歴史と現状をめぐって、スポーツ社会学およびジェンダー研究の視点から考察を加えたものである。

スポーツという研究対象は、そこに生物学的性差と密接にかかわる身体という問題が含まれるゆえに、ジェンダー研究に

とってさまざまな課題をつきつけてきた。その一方で、社会的に構築された性別としてのジェンダーという視点は、男性主導で展開してきた近代スポーツを考察する上で、避けることのできないきわめて重大な課題であり続けてもいる。本論文は、こうしたスポーツとジェンダーという二つの領域を架橋すべく企てられたものである。

本論文において、論者は、サーフィンという、日本のスポーツ社会学の領域でこれまでほとんど考察の俎上にのぼることのなかった対象をめぐって、参与観察を通じたフィールドワークを実施し、そこにつどう男女のアスリートたちの社会関係を、ジェンダーの視座から分析することを通じて考察を加えている。その上で、現在、ゆらぎのなかにある近代スポーツをめぐる問題状況を、ローカリズムやコミュニティなどの視点をからめつつ果敢に解剖しようとしており、日本のスポーツ社会学研究に、新たな視座をつけくわえることに成功している。

論者は、まず、序章において、近代スポーツをめぐるジェンダーの視点からの諸理論や諸考察をていねいにレビューし、また、ジェンダーの視点にたったフィールドワークをめぐる調査法の発展を跡づけ、その上で本論文における自らの立脚点を明らかにした上で、実際のサーフィンの現場におけるフィールドワークの膨大な記録をもとに、考察を進めている。

第一章で述べられているように、記録や数量化されたデータなどが大きな役割を果たす他の多くの近代スポーツとは異なり、サーフィンは、競技スポーツとしてよりもむしろパフォーマンス中心のスポーツとして成立し発展してきた。その意味で、本来、サーフィンは、男女の身体的性差をそれほど問題にしない、どちらかといえばジェンダー規範がゆるいスポーツになりうる可能性をもっていたといえるだろう。実際、本論文でも述べられているように、サーフィンは、ウインドサーフィンやスカイダイビング、スケートボードなどととも、身体を使うことで生じるフロー感覚を重視する傾向の強い、効率性や計測可能性を超えた、いわゆる「エクストリーム・スポーツ」の一種として、今も位置づけられることが多いのである。論者は、身体的性差やジェンダー規範を越えた形で発展することも可能であったこのサーフィンが、男性主導＝女性排除の仕組みを生み出していく様相を、以下の各章における分析を通じて考察することで、ジェンダー研究の視点からのスポーツ社会学研究に、新たな光を当てようとしたといえるだろう。

第二章以後においては、「異物」である女性サーファーに対する排除の構図と、その一方で、女性を「所有物」であるかのように扱う男性サーファーたちの日常実践が、具体的な会話や態度の分析を通じて明らかにされていく。特に、男性サーファーたちのホモソーシャルな「男同士の絆」の形成メカニズムや、このスポーツが、カウンターカルチャーとして発展したがゆえにはらんでいる一種の「逸脱」への指向性の分析、さらに、その指向性が生み出す女性に対する視線の問題性など、サーフィンと男性性の関係をジェンダーという視座から考察している点は、ジェンダー研究、スポーツ社会学研究にとって重要な貢献をもたらしたといえるだろう。

続く第三、四章においては、こうした男性たちのホモソーシャルな場としてのサーフィンにおける、女性たちの位置と対応が分析されている。特に、女性サーファー、男性サーファーの周囲にいるサーフィンをしない女性、さらに男性サーファーの妻たちなど、サーフィンをめぐる女性間の差異とこれら女性間の葛藤、あるいは男性サーファーへの女性サーファーの抵抗戦略など、人間関係のミクロなポリティクスの描写は、リアルであるとともに、きわめて興味深いエスノグラフィーになっている。

第五章および最終章においては、競技スポーツとしてのサーフィンと距離をとりつつあるサーフィンの新しい潮流について考察が加えられている。さまざまな地域でその地域独特の波を求めて旅をするサーファーたちの姿や、ある特定のローカルな場に定住しつつ、共にサーフィンを楽しむローカルなサーフィン・コミュニティの調査に基づく考察は、競技スポーツ、近代スポーツとは異なるサーフィン文化のもうひとつの可能性を示しているといえるだろう。なかでも、旅やローカルなサーフィン・コミュニティでの女性サーファーの考察は、スポーツとジェンダーをめぐる新しい視野をきりひらいたものといえるだろう。

このように、本論文は、スポーツ社会学およびジェンダー研究にとって、多くの知見をもとらすとともに、今後のスポーツ研究、ジェンダー研究にとってさまざまな切り口から新しい視座を提示しており、きわめて意義のあるものと考えられる。

しかし、本論文にはいくつかの限界があることも指摘しておかなければならない。長期間にわたるフィールドワークの成果を十分には生かし切れていない点が見られることや、理論的な整理という点でやや議論が不足している点など、まだまだ改善すべき部分が存在しているからである。しかし、そのことは、サーフィンという興味深いテーマを対象に、スポーツ社

会学およびジェンダー研究に新しい知見をもたらしたという本論文の意義を大きく減ずるものではない。

以上、審査したところ、本論文は、博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。2006年10月26日、調査委員3名が論文内容とそれに関連する事柄について口頭試問を行った結果、合格と認めた。